



(22 cm × 39 cm 額装)

佐 散尔堂 万多
さびしさにたへたる人のまたもあれな
庵ならへむふゆの山里 (西行歌)

上掲は昨年末の第59回あしで會展出陳の拙作である。言わでものことながら、このような小作品とて作品づくりは簡単ではない。だいいち出典の歌なり俳句なりを作者に代わって如何に表現するか、というのであるから何とも畏れ多いことである。また漢字作品に比して仮名の場合、書きぶりにも散らしなど特有なものがあったり、色々な約束事や仮名独特な不文律的心得も多い。先ずは基本として避けて通れない平安以来の伝統的書きぶりを学び、それらをもとにして、例えば綺麗な手紙を書くが如く、という風では仮名作品として訴求力に欠けることになってしまふのである。

即ち作品創作となれば、伝統＋アルファが求められるのである。

戦前仮名作品は概ね小字仮名であったのだが、戦後「大字仮名運動」が興ったこ

とに併せ、時代性を見据えた当時の氣鋭書家達が夫々の書風表現で相応の成果を上げ今日の發展、展開へと繋げた筈が、然るに昨今見受ける仮名作品何れもの書風がややもすれば一辺倒に見え、果たしてどなた様が書かれたものやら甚だわかり辛いように思えてならないが如何・・・。

扱て「天外」では先師以来漢字・仮名の隔てなく、一書を愉しむ一をモットーに、仮名では基本連綿や「調和体」「上代様の仮名の雅」をと、書を広い視野で見つめての取り組み、それこそ生涯を通して共に学び愉しむべく愈々に鋭意工夫していかねばなるまいと、年頭に際して自身は自戒頻りにして、またスタッフ一同、遂に今年迎えるあしで會展60回目という大きな節目に向かって更に一丸と成つて益々の精進をと誓い合つた次第です。